

患者を生きる 774

目に炎症・ひざには水……難病の診断

静岡県三島市で8月末、全国のがん拠点病院の相談員を対象にしたワークショップが開かれた。テーマは「がん告知に悩む家族への対応」。集まった約60人を前に、「模範患者」と相談員のやりとりが続いていた。

「まだ言わなくてもいいですよね」
末期がん患者の妻を演じるのは、黒岩かをるさん(60)。医療従事者のコミュニケーション研修を手がける株式会社「薫陶塾」(福岡市)の社長だ。「末期ということを夫が深く受け入れる時期は過ぎているんじゃないでしょうか」。夫に本当のことを話すべきか。目を伏せ、途切れがちな声で訴える。

「言わなくてもいいですよね」と何度も同意を求める妻に対し、相談員はこれまでの治療経過や患者本人の意向を聞き出そうとする。互いが言葉に詰まり、沈黙が続く。「本当のことを伏せると、医師や家族への不信につながることもあります」と相談員が切り出したところで、20分の予定時間は終わった。

「相談員はすぐに同意すればよかったのでは」「一緒に考えましょう、と私なら言う」と参加者が口々に述べた。黒岩さんは妻を演じたまま、相談員とのやりとりを振り返り「話を聞いていたたく時間を持って気持ちの整理ができました。自信と覚悟と誠意をもって答えてくださった(夫に本当のことを話しか)決断できたかもしれません」と話した。

医療現場でのコミュニケーションの重要性が高まり、患者や家族を演じる「模範患者」が医療者の研修や教育現場で活動している。薫陶塾には約100人が登録している。

演じる①

黒岩さんは大学卒業後、英国留学を経て、英語学校の人材開発部門で働いていた。92年、左目の異変に気づいた。朝、目を覚ますと白い幕が視界を遮っていた。近くの大学病院でブドウ膜炎と診断され、入院。炎症を抑えるプレドニンの大量点滴を受けた。

信頼

退院後は仕事を調整できる部署に移ったが、以前のように働ける自信はなかった。93年に退職して実家に戻った。眼科医から「目が悪いただけだから何をしてもいい」と言われ、好きなテニスに打ち込んだ。ところが、ぎっくり腰になった。整体院で治療を受けると、ひざに水がたまったり、ひじがはれたり、かえって悪化した。大学病院の整形外科を受診すると、医師は言った。「難病のパーチェット病です」

(北林晃治)



「がん患者の妻」を演じる黒岩さん＝静岡県三島市

「患者を生きる 演じる」は6回連載します。

■ご意見・体験は、〈メール〉iryō-k@asahi.comへ。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

患者を生きる 775

「このまま薬飲み続けていいのか」

演じる②

信頼

福岡市の黒岩かをるさん(60)は94年、難病のベーチェット病と診断、認定された。口の粘膜や目、皮膚に炎症や潰瘍などを起こす難病で、関節や神経に症状が出ることもある。黒岩さんが数年にわたって悩んできたブドウ膜炎や腰や手足の関節の痛みは、この病気に特徴的な症状だった。原因はわからず、現在のところは対症療法しかないと知らされたが、黒岩さんは「不調の正体がわかってよかった」と受け止めた。

腸にも潰瘍が見つかり、医師からサラゾピリンという薬を飲むように言われた。痛みは消えたが、副作用のむくみが出た。服用をやめると、前より痛みが増した。家の敷居もまたげず、体に密着する服も着られなかった。膠原病内科で、今度は痛風の治療によく使われるコルヒチンという薬を渡された。「言われるまま、薬をのみ続けていいのだろうか」。初めてちゅうちょした。

96年12月、知り合いに紹介され、市内で内科医院を開く大田義美医師を訪ねた。診療経過を書いたメモを渡すと、大田さんは「これまでの医者は何ばしよっちゃるうね」と言った。「こうして記録していると助かる」とメモをコピーして、カルテにはり付けた。

漢方薬を中心にした治療が始まった。定期的に受ける血液検査の結果がよくないと、大田さんは「口養生が悪いんじゃないか」と厳しく言った。しかし、話をじっくりと聴いてくれたし、怒ったようなぶっきらぼうな口調から、自分のことを真剣に考えてくれていることが伝わり、うれしかった。

夜には微熱が出たりして、症状はなかなかよくならなかったが、1年ほどすると、痛みもなくなると回復した。

病気がつきあいながら暮らしていくために、母の久美子さん(88)と暮らす自宅の改修を決めた。敷居は取り除き、バリアフリーにした。「これで年をとっても病気がひどくなくても大丈夫」と気持ちが高まった。

症状も快方に向かった。社会福祉士や産業カウンセラーなどの資格を取り、心理学やホスピスなどを学ぶ市民活動に参加した。

そんな時、相手の気持ちに寄り添うための傾聴力養成講座の講師から「模擬患者をやってみませんか？」と誘われた。

「モギカンジャ?」。初めて聞く言葉だった。医学生の間診の練習相手をするという。何だか面白そうだと思うた。



模擬相談を終えた女性と話す黒岩さん＝静岡県三島市

aサロン 検索 担当記者のブログをアスパラクラブの「aサロン」で、新聞購読者会員向けに掲載しています。

■ご意見・体験は、〈メール〉iryō-k@asahi.comへ。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

経験生かし「模擬患者の会」つくる

演じる③

信頼

ペーチェット病と認定されて3年。福岡市の黒岩かをさん(80)は97年4月、医学生を相手に模擬患者(S.P.)を演じた。

「ここに書いてあることを覚えて、聞かれたことに答えてください。書いてないことはアドリブでお願いします」と、指導教官からA4の紙を渡された。設定は、胃カメラでもても異常がないのに、胃のむかつきやもたれがある患者だった。

学生に「食事は何を食べてますか」と聞かれ、アドリブで答えたが、「これで学生のためになるの？」と感じた。演じている患者と、自分とが混ざり、中途半端な患者にしかならない気がした。

「コミュニケーション能力の大切さが指摘され、模擬患者が参加する研修は広がりつつあったが、方法論は確立されていなかった。一方で、的はずれな質問や未熟な言葉づかいはあったが、多くの学生から「患者」と向き合おうとする一生懸命さが伝わってきた。

かつて会社で新入社員や若い社員の研修を担当したころを思い出した。最初は頼りなかった若者たちが研修を終えて現場へ巣立ち、たくましく成長する姿をたくさん見てきた。

「もう一度、若い人たちと、ともに考え、一緒に学び、はぐくみあっていきたい」

99年3月、全国の模擬患者や医学生を指導する医療関係者が集まったセミナーで相談した。「模擬患者の会をつくりたい」

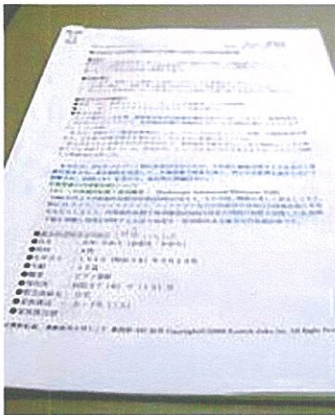
「九州にはないから、できたらいいですね」「うちの大学にも来てください」

その言葉に押されて4月、仲間4人で「福岡SP研究会」を立ち上げ、市内のマンションの一室に事務所を構えた。当初から「ボランティアではできない専門性の高いもの」と決め、活動手当や交通費を支払った。

模擬患者には設定された役を演じきる演技力が必要だ。だが、目的は医学生や医師の実習。「医師」の言葉や態度をどう感じたかを記憶しながら、感情的に相手を攻撃しない冷静さも求められる。そのためにも、正確で綿密なシナリオのもと、演技やフィードバックの仕方を訓練することが重要だった。

家庭用の医学書をひき、活動で知り合った医師に相談しながらシナリオをつくった。症状や既往歴はもちろん、家族との関係やふだんの生活状況などを細かく設定した。

そのシナリオを持って福岡や長崎、山口などの大学の医学部に出かけ、役を演じた。



模擬患者の「シナリオ」。家族構成や職業、病院までの距離などが細かく設定されている

aサロン 検索 担当記者のブログをアスパラクラブの「aサロン」で、新聞購読者会員向けに掲載しています。

■ご意見・体験は、〈メール〉iryō-k@asahi.comへ。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

患者を生きる 777

試行錯誤続け、仕組みを整える

演じる④

信頼

福岡市の黒岩かをるさん(80)は99年4月、仲間4人で模擬患者の団体を立ち上げた。2年間で大学の医、歯、薬学部、看護学校などへ60回、研修に出かけた。主婦や精神保健福祉士、薬剤師ら会員も60人に増えた。

01年夏にNPOになり、「薫陶塾」と名付けた。香りをしみこませた粘土を焼いて、陶器に仕上げる。若者に、そんなふうに着てほしいと思ったからだ。医学生が企画した勉強会に呼ばれることもあった。「謝礼は出世払いで」と笑顔で応じた。

02年には学生13人と米国のイリノイ大シカゴ校を訪れた。模擬患者を活用した教育の本場を見たかった。ビデオカメラ付きの専用の診察室が19室。訓練を受けた模擬患者が常駐していた。「日本にもいつかこんな施設を」という思いを強くしながら帰国した。

インフォームド・コンセントの場面を演じていたとき、すでにシナリオで知らされていた病名を告げられ、白々しさを感じた。学生たちも、模擬患者に対し「リアリティーが足りない」と感じることもあると分かった。

模擬患者は患者を演じることに集中するのがいい。研修の打ち合わせにあたり、学生に「この例の対応は難しかったね」「患者によって感じ方は違いますよ」などと言って気づかせる役割が、別に必要だと感じた。

だが、NPOとしての活動を広げるにつれて、財政的には厳しさが増していった。「ボランティアじゃないの?」「補助金をもらっているんですよ」と言われたこともあった。理解されない悔しさを抱える黒岩さんを、母の久美子さん(83)は黙って見守り、金銭的にも助けてくれた。

「實」を保ちつつ、経営を安定させようと、03年12月に株式会社にした。翌年、東京にも拠点を置いた。

研修を受ける人や目的にあったシナリオをつくり、参加者の受け答えを評価する仕組みを整えた。研修を企画するコーディネーター、司会進行役を務めるファシリテーターなど役割を分担し、チームで研修にあたった。ところが、株式会社としての運営が軌道に乗ら始めた06年春、黒岩さんは手や首に、頻繁にしびれや痛みを感じるようになった。数年前から、体の不調はあった。「落ち着いていたパーチェット病が、また?」でも、いま立ち止まることはできない。不安を隠して仕事を続けた。



ワークショップで参加者の議論を聞く黒岩さん＝静岡県三島市

aサロン 検索 担当記者のブログをアスパラクラブの「aサロン」で、新聞購読者会員向けに掲載しています。

■ご意見・体験は、〈メール〉iryo-k@asahi.comへ。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

患者を生きる 778

志貫くため、ともに学び育む

演じる⑤

信頼



母の久美子さん(左)を見舞った黒岩さん＝福岡市

模倣患者の株式会社「薫陶塾」をつくった福岡市の黒岩かをるさん(80)は06年春、手や首にしびれや痛みを感じるようになった。大学病院で検査を受け、脊髄にできた腫瘍が神経を圧迫する硬膜内腫瘍と診断された。しびれをとるには手術しかなかったが、仕事との調整が難しく踏み切れず、9カ月間は痛みで眠れない夜が続いた。

07年2月に手術を受け、翌月退院した。「少しゆっくり休めばいいのに」という母の久美子さん(88)を置いて、数日後には出張にでかけた。つえをつき、首を固定するカラーをつけて半年間、福岡と東京を往復した。

「何げない一言で患者や家族は傷つき、不安になることがあります。模倣患者として『あの言葉の後、説明が頭に入らなくなりました』と伝えることで、医療者が意識の『すれ』に気づき、よりよい関係を生み出すお手伝いになればと思っています」

今年9月、都内でコミュニケーションをテーマに病院職員らに語りかけた。集まったのは20人ほど。病院経営や診療報酬を取り上げるときに比べ、空席も目立った。

翌日、参加した女性からメールが届いた。「患者が病院に求めているのはアメニティーではなく、医療者とのコミュニケーションだと思えます。私も、そんな病院をつくるために研鑽したい」。うれしかった。少しずつだが、現場は確実に変わってきている。

それから10日後、黒岩さんは1カ月ぶりに福岡市内の病院に久美子さんを見舞った。久美子さんは昨年、肺がんの手術を受け、放射線治療のために入院している。

「調子はどう?」この前より顔色がいいね「あら、そこかしら」

ベーチェット病を患い、実家に居候したこのこと。模倣患者の活動を始めたものの経済的にも精神的にも苦しかったこのこと。

「出世払い」と言った学生が、いまは一人前の医師をめざして頑張っていること。おしゃべりをしながら、久美子さんは「あなたはいまだに出世払いなのね」と笑った。

自身、患者であり、患者の家族だ。

ここ数年、研修先との交渉や企画運営、模倣患者を育成する仕事に専念してきたが、最近の機会があれば、自分で演じている。

「患者と医療者が、ともに手を取り合いながら、よい医療をはぐくんでいきたい」。その志を貫くために。(北林晃治)

■ご意見・体験は、〈メール〉iryō-k@asahi.comへ。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

aサロン 検索 アスパラクラブの「aサロン」で新聞購読者会員向けに掲載している担当記者のブログを更新しました。